

両氏が心がけてきたこと

このページでは、成功した両人に、お聞きした、これまで心がけてきたこと、成功するために必要なことをお伝えします。

「今日の成功に不可欠だったことは、なんだと思いますか。」

清孝 クリエイト（創造）する力です。それが何であれ、「創造する」ということは、途方もない労力と根気、体力が必要です。だからといって創造のない明日は、今日と同じ。違う明日を創るから意味があるし、それを必要としてくれる人も現れると思います。

「創造。いい言葉ですが、難しいですね。」

清孝 「無」から「有」を生み出すことが創造ですが、「無」とは無数の小さな「有」のこと。それを組み合わせて新たな「有」を作り出すことが、創造だと思います。ですから、絶えず、いろいろなことを注意して見ることで、人の意見をよく聞くことが欠かせません。

その点、当時から清賢は、よく人の意見を聞き、よく観察をしていた。当時、私たちの製品は確かに良い製品だったけれども、それを認めさせたのは清賢の船。装置の働き以上に、彼はよく現場を見、細かい点を改良していたから、彼の船団そのものが「創造品」であったとも言えた。その証拠に「弟さんを100万円で迎えたい」という申し入れもあったんですよ。彼には秘密にしていたんですが（笑）。

まとめ

取材を通して感じたこと、それは「2つの個性」でした。取材中、清孝氏は、「クリエイティブ（創造）」、清賢氏は「現場主義」という言葉を多く使われました。兄が創造し、弟が実証する。弟が現場の声を聞き、兄がさらに創造をする。全然違う能力、考え方を持つ両氏が、ひとつの目的に向かって進む、それは、まるで「らせん」を描く、下りの先のよう。

清賢 私は徹底した現場主義を買っていました。私どもの会社の理念に「買ってよろこぶ。売ってよろこぶ」があります。買ってもらう喜びでもらえて初めて商品なのだと思っています。どんなに良い物でも、私どもの手にある間は「製品」であって「商品」ではない。

徹底して使う人の側でものを考える。これは経営にも言えることで、働く人の側、取引先の視点で、ものを考えています。兄清孝は、私たちの要望や提案をよく形にしました。会社で持つおびただしい特許や実用新案のうち、現在でも半数以上が兄によるものです。また、操業当初、事業がうまくいったひとつの理由が「父や祖父の信用」でした。現在も「信用」を第一に経営を考えていますが、このころの父の影響が大きいと思います。

「最近、将来を見いだせない若者が増えていきます。若者に対するメッセージをお願いします。」

清孝 ぜひ、知恵を出してください。若いころは単純作業を任せられがちですが、どんなシーンにも改善する点があります。小さな知恵を出す癖をつけること。これが大切です。資源は有限ですが、知恵は無限なのです。清賢 そして、その知恵は、必ずあなたの周りにあるのです。自分の周りにアンテナを立ててください。違う明日へのヒントが、きっとあるはずですよ。



小さいころ、よく遊んだという原城跡。桜の美しさは今も忘れないそうです。

顕彰碑建立除幕式



顕彰碑発起人代表の皆さんと。中央は清孝氏の妹林田キマさん。

3月29日(日)、南有馬町古野いこいの広場で、古野清孝・清賢両氏の顕彰碑の除幕式が行われました。顕彰碑は、南有馬町の顕彰碑建立発起人会が、ふるさとの偉人である両氏の功績を讃え、後世に残そうと呼びかけて実現。多くの市民がお金を出し合い完成したものです。

当日は、両氏も出席。その後に行われた祝賀会では、古野清賢氏から、建立に対するお礼に続き「遠方で暮らす私たちにとって、ふるさとは、母港のようなもので、寄港（帰省）するたびにほっとします。私たちのふるさとを大事に守り育てていただいていることに感謝します」とあいさつ。感謝の気持ちを伝えました。

寄附をした参加者からは、「私たちの誇りのお二人が、いつまでも、私たちのことを忘れずにいてくださることが、何よりもうれしいですね」との声もありました。



建立された顕彰碑

清孝は、ずっと温めていた構想である魚群探知機の研究を始めた。「必要は発明の母」と言うが、世の中の発明のほとんどが、必要に迫られて誕生する。しかしこのとき、「魚群探知機」というニーズは、世界のどこにもなかった。あったのは、「海の中が見えたら、さぞかし楽しいだろうな」という清孝の単純な衝動にも似た気持ち。それだけだった。

「タンチキ」か、「インチキ」か

清孝は、軍関係の仕事を手伝っていたこともあって、海外の技術に明るかった。目を付けたのは、当時軍で使っていた「音響測深機」。超音波の反響で海の深さを測る装置だ。泡を超音波で反射させればよいのではないかと考えたのだ。

試作に次ぐ試作。次第に魚が写る精度は高まった。それでも「タンチキ?」「インチキの間違いじゃないのか?」と漁師からは取り合ってもらえない。

ある日、やっと船に乗る機会を得、弟清賢が船に乗りこんだ。機械に映る魚群の群れに胸を躍らせて、網を入れる清賢。確かに豊漁の感触が。「ほら見てみる」喜び網をあげる清賢。ところが網の中はクラゲの大群だった。

怒った船頭は、清賢を船から海に突き飛ばした。「もうこりこり」それでも、そんな言葉は彼らにはなかった。

枳富丸「魚群探知機」を装備

そんな二人を救った船が五島列島岩瀬勝浦の枳富丸



25歳ごろの清賢氏

だった。いろいろな事情で、水揚げ最下位の枳富丸のわが船頭となった清賢。当初、魚は思ったように獲れない。それでも、明るい性格も幸いし、技術が未熟でも、魚は獲れなくても清賢の船は、いつも陽気だった。明るいただけではない。清賢は、魚の生態を調べ、網を改良するなどその努力は人一倍だった。陸で改良を続ける清孝。海で魚を獲る清賢。血のにじむ努力をする二人に、その日は来た。

論より証拠

ある日のことだ。漁から帰り、顔をくしゃくしゃにしている清賢。それを見て肩を落とす清孝。いつものことだったが、この日の清賢は違った。「やったよーおれたちやったんだー!」

清孝が清賢の背後に目をやると、船が傾くほどのたくさんの魚が、そこにはあった。

船主、門前に列をなす

「その後は、ご覧のとおりですよ」

穏やかに笑う清孝、清賢両氏は、大きく手を広げて言った。



メーカーフルノの躍進が始まる

「毎日毎日、魚群探知機をください。と行列が絶えないんです。そりゃそうでしょうね。漁獲量が全然違うんですから」一晩600万円をあげる記録を作ったこともあるという。今の物価ではない。総理大臣の月給が3000円の頃の話をした。

「濡れ手に泡（粟）をつかむ」とは、欲しい物が簡単に手に入ることをたとえ。だが、泡の状況から魚がどこにいるか知ろうとした両氏の努力は、筆舌に尽くし難い、壮絶なものであった。

確かに泡はヒントだったが、成功の理由ではなかった。二人の情熱こそが、成功の真の理由だったのだ。(終)